阿波市阿波町の方言

方言班（徳島県方言学会）

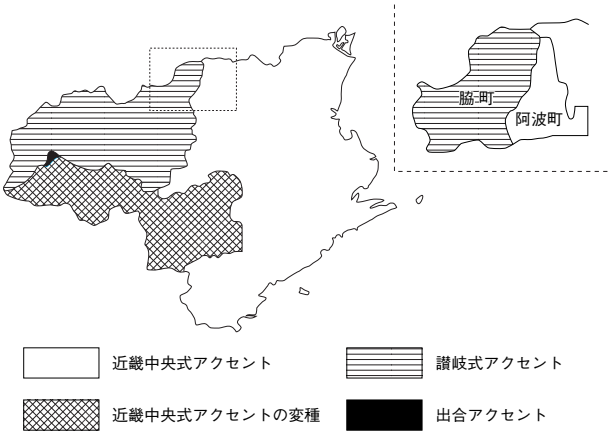
仙波　光明[*1]　　村田　真実[*2]

要旨：下郡里分の西端にあたる阿波町の方言をアクセントの面から見るとどうなっているか。徳島型アクセントのままなのか，あるいは池田型の影響を少しでも受けているのかといった問題意識に基づいて調査分析を行った。その結果，アクセント変化の方向を含めて，やはり徳島型に属することが分かった。調査項目が少ないながら，語彙や文法の面からも下郡の特徴が確認できる。

キーワード：アクセント，徳島型，２拍名詞，３拍動詞，手ぐつ

１．阿波町の方言区画上の位置づけ

徳島県の方言区画上から見た阿波町は，森（1982）によると，「下郡里分」に属し，この地域の西端に当たる。県西部，美馬市以西の平地部は「上郡里分」と呼ばれるが（森・1982），この下郡と上郡を区画するもっとも明確な標識がアクセントである。



平山輝男・上野和昭（1997）による

図１　徳島県のアクセント分布

２．アクセント

１）概要

徳島県下のアクセントの詳細は**表１**のようになっている（生田・1951，山名・1956，森・1982，上野善・1984，上野和／仙波／森・1991，上野和・1997）。県西部は，京阪式が派生したものや讃岐式が派生したものが複雑に入り混じっており，体系の把握が難しいが，県東部は京阪式であり，古い姿を残している。

表１　徳島県下のアクセント分布

京阪式（龍神型）		県東部
京阪式変種	垂井式	三好市西祖谷山村・東祖谷山村 那賀町木頭村
讃岐式（池田型）		県西部
讃岐式変種	山城谷式	三好市一宇村・山城町 美馬郡貞光町・半田町
	出合式	三好市池田町出合

本稿では，徳島市を中心に県東部に広がる京阪式アクセント（『補忘記（ぶもうき）』＝1687年刊＝の時代の面影を残すもので，現代京都・大阪とは異なる音調が聞か

＊１　徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部　　＊２　徳島大学大学院人間・自然環境研究科

れる）を徳島型と呼び，三好市池田町を中心に県西部に広がる讃岐式アクセント（香川県に存在する讃岐式アクセント観音寺型と似通った体系を持つ）を池田型と呼ぶ。類の別とその所属については『早稲田語類』に従った。なお，表記上の煩雑さを避けるために，それぞれのアクセントを示す際にH，Lの記号を用い，高い拍をH，低い拍をLとして記述する。特別に助詞をあらわしたい場合はハイフンで繋いだ（「竹が」であれば「高高高」の音調で発音されるので，これをHH－Hと表記する）。

吉野川上流域には池田型が,下流域には徳島型が,中流域には池田型と徳島型両方の性格を持つ境界地帯が存在する。本調査の対象は吉野川中流域の阿波町であり，阿波町の西に隣接する美馬市脇町は，徳島型・池田型アクセント境界地帯として知られている（加藤・1968，村田・2010）。境界地帯と隣接する阿波町であるが，阿波町も境界地帯に含まれるのであろうか。加藤（1968）の報告には阿波町についての記述はない。阿波町のアクセントは徳島型であるのか，それとも境界地帯の様相を示すのか。この答えを得るべく，今回の調査結果をもとに阿波町のアクセントについて報告をする。

使用するデータは，2009年夏に阿波学会方言班（徳島県方言学会）と徳島大学総合科学部国語学研究室が行った調査の結果であり，阿波町在住者７名（80代１名，70代２名，50代４名）にご協力を頂いて得たものである。調査は読み上げ式の面接調査であった。調査語については後述する。

２）徳島型と池田型の相違

前述した池田型と徳島型の特徴をまとめると以下の表のようになる。目につき易くするため，異なる部分を太字にし，かつ網を掛けた。

表２　類の統合状況と音調

	池田型		徳島型	
１拍名詞	省　略			
２拍名詞	**1・3**	HH・HH－H	**1**	HH・HH－H
	2	HL・HL－L	**2・3**	HL・HL－L
	4	LH・LL－H （LH－H）	4	LH・LL－H
	5	LH・LH－L	5	LH・LH－L
３拍名詞	省　略			
２拍動詞	1	**HL**	1	**HH**
	2	LH	2	LH

このように，２拍名詞の類の統合状況（第３類が第１類と同じHH・HH－Hで実現されると池田型，第２類と同じHL・HL－Lで実現されると徳島型）と，２拍動詞第１類の音調の違い（HLで実現されると池田型，HHで実現されると徳島型）によって，徳島型と池田型は区別される。この点について特に注目し，結果を見ていく。

３）２拍名詞のアクセント

阿波町が徳島型の地域であるのか，境界地帯であるのかを判断するべく，２拍名詞のアクセントについて調査をした。

調査語は以下の通りである。名詞については，それぞれの語に名詞単独，名詞＋助詞＋動詞，「この」＋名詞＋助詞＋動詞の項を設け，厳密に調査をした。調査語彙は類別語彙表から偏りのないよう選定した。

表３　２拍名詞調査語

類	語　彙	語数
1	竹，箱，国，牛，梅，鳥，口，酒	8
2	歌，音，雪，冬，夏，人	6
3	垢，網，泡，腕，鬼，貝，神，靴，雲，塩，炭，谷，月，毒，花，浜，孫，店，夢，綿，足，家，犬，色，馬，親，髪，肝，熊，米，舌，土，墓，腹，豆，耳，山，指	38
4	板，跡，外，糸，傘，松，海，息，麦，数，針，稲，屑，帯，肩，鎌，舟，箸，空，中，錐，屋根，種，杖	24
5	汗，窓，猿，鶴，雨，蛇，亀，朝，影，蜘蛛，声，鍋，井戸，秋	14

表４　阿波町の２拍名詞アクセント

		２拍名詞
類の統合数（統合状況）		４（１／２・３／４／５）
音調	第１類	HH・HH－H
	第２類	HL・HL－L
	第３類	HL・HL－L
	第４類	LH・LL－H（LL－L）
	第５類	LH・LH－L

表３に示す語について調査を行い，得られた結果をまとめたものが**表４**である。

これによれば，第３類が第２類に合流しており，阿波町は徳島型の体系を持っていることが分かる。

４）２拍名詞第３類所属の特殊な語

体系を把握した上で，語別に詳細を見てみよう。

徳島型の体系を持つ阿波町であるが，第３類について独特な動きを見せる語があることが分かった。

「**穴（あな）**」については，LH・LL－H（LL－L）が聞かれ，低起の語となっている。「京都語で対応の例外をなす語」とされており，第３類でも特殊な音調が聞かれる。「**皮（かわ）**」も同様であり，LH・LL－H（LL－L）が聞かれ，低起の語となっている。

「**墓（はか）**」については，HH・HH－Hが聞かれた。これは第１類の音調と同じである。「墓」という語についてのみ，池田型のように実現されるようである。岸江他（2010）の調査結果によると，「墓」は徳島型の地域でもHH・HH－Hと発音されたり，HL・HL－Lと発音されたりすることがあり，ゆれている。

５）２拍動詞のアクセント

２拍名詞と同様に，２拍動詞についても調査をした。調査語は**表５**の通りである。

表５　２拍動詞

類・活用	語　彙	語数
第１類（五段）	行く，売る，買う，泣く，振る，飛ぶ，鳴く，聞く，履く，刈る，止む	11
第１類（一段）	着る，寝る，する	3
第２類（五段）	書く，切る，出す，飲む，飼う，降る，蒔く，指す，折る，掘る，有る	11
第２類（一段）	来る，出る，見る，取る	4

これらの語の調査から得られた結果をまとめたものが次の**表６**である。

表６　２拍動詞のアクセント

	２拍動詞
第１類（五段）	HH
第１類（一段）	HH
第２類（五段）	LH
第２類（一段）	LH

以上，第１類（五段活用及び一段活用）の音調はHHであり，徳島型であると判断出来る。

６）３拍動詞のアクセント

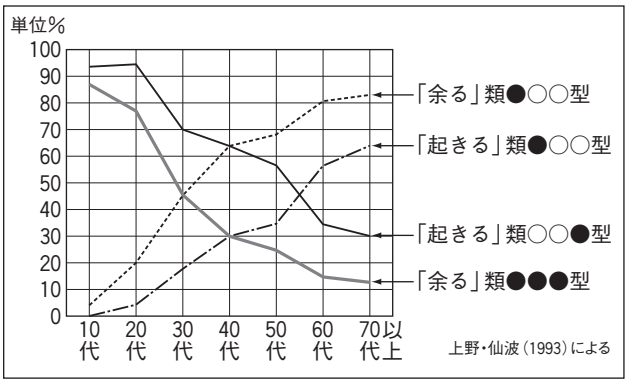
３拍動詞について，五段活用第１類（洗う），同第２類（作る，走る，開く），一段活用第１類（入れる，植える），同第２類（起きる，建てる，閉じる，逃げる，生える）について，９名の方から得られた結果を個別に検討すると，池田型への変化が終わったと思われる語と，徳島型と池田型の間で揺れていると思われる語に分かれていて，調査語彙の中では徳島型だけが現れた語はなかった。

五段活用の「洗う」と「走る」，一段活用の「入れる」と「植える」は，いずれもHHHであり，本来のHLLは現れていない。また五段活用の「歩く」と一段活用の「起きる」「建てる」「逃げる」は全員LLHであった。

揺れが見られた語は，以下の通りである。

五段活用の「作る」は，LLH（４名），HHH（４名），HLL（１名）ともっとも揺れが大きく，「開く」はHHH（８名），HLL（１名），一段活用の「閉じる」はLLH（６名），HLL（３名），「生える」はLLH（７名），HLL（２名）となっている。

このような現象は下郡の各地で進んでいるようであり，すでに増田明（1989）が鳴門で見られることを指摘しているほか，上野・仙波（1993）が徳島市での状況を報告しているところである。



●図２●３拍動詞「余る」類と「起きる」類とに聞かれる終止連体形アクセントの実態（徳島市）

図２　徳島市における３拍動詞アクセントの変化

７）まとめ（アクセント）

阿波町は京阪式アクセント徳島型の体系を持つ。隣接する美馬市脇町は徳島型と池田型の両方の性格を持つ境界地帯であるが，境界地帯に阿波町は含まれない。阿波町は，アクセント変化の方向を含めて徳島型の地域の西端に位置づけられることが分かった。

なお，本稿の項目としては取り上げなかったが，２・３拍の形容詞についても調査を行った。何れも

徳島型であった。結果は以下の表の通りである。

表７　３拍動詞のアクセント

	３拍
第１類	HHH
第２類（五段）	HHH
第２類（一段）	LLH
第３類	LLH

表８　形容詞のアクセント

	２拍	３拍
第１類	－	HLL
第２類	LH	HLL

３．語彙

語彙については，十分な調査を行うことができなかった。しかし，手袋のことを「てぐつ（手沓）」と言っていたことは確認できた。これまで，この語は香川県東かがわ市（グローブミュージアム），脇町，木屋平の資料に見つけることができていて，讃岐山脈を越え，吉野川を渡って，この語が分布していたことが分かる。

さて，アクセント調査と同時にいくつかの語彙項目と文法項目についての調査を行うことができている。語彙項目は，「カマキリ（蟷螂）」「ヒキガエル（蟾蜍）」「トーモロコシ」「まぶしい」「みじょう」について調査した。これらは，日本中での方言量の多さ（実に様々な語形が報告されている）や，徳島県の方言区画の目安として注目され，継続的な調査が行われてきたものである。

１）カマキリ（蟷螂）

森（1962）には，カマ系，イボジリ系，トーロー系，オガメ系，エンマ系，ホトケ系，その他という具合に多彩な方言系が県下に分布することが報告されており，その有様は，金沢（1976）によっても知ることができる。今回の調査では，ほとんどがカマキリであり，仙波他（2002）での調査結果と矛盾するものではなかった（**図３**）。ただし，１人だけカマタテと回答しており，森（1962）によれば吉野川対岸の麻植郡山瀬（山崎）で確認されているものである。吉野川を挟んで同語系が分布するのは，美馬市のホトケンマの分布と同様の現象と考えてよいであろう。

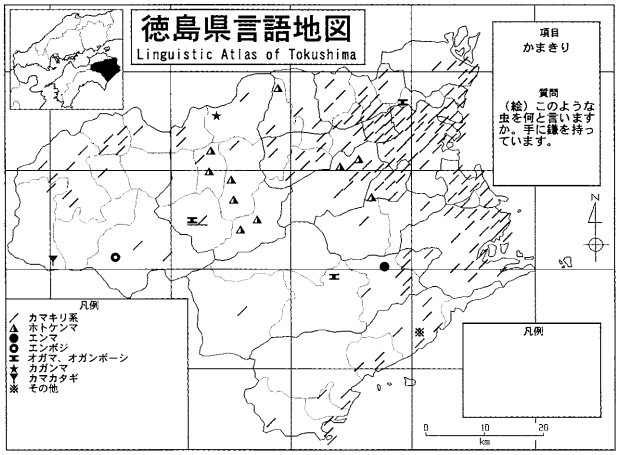


図３　カマキリ

２）ヒキガエル（蟾蜍）

阿波市を挟む東西の地域で確認されているゴータ・ゴートが期待されたのだが，ほとんどがオンビキを使うとの回答であった。なお，仙波他（2002）でも確認されていない。ただし，ゴータ・ゴートを聞いたことがあるという回答もあった。

３）トーモロコシ

ほとんどからナンバが回答されているが，年齢が下がるにしたがって，トーモロコシも使用しているようである。徳島県下においては，美馬市および下郡とうわて里分（勝浦平地・那賀平地・小松島市・阿南市）にナンバが広く分布することが分かっている。なお，上郡に分布の中心があるトーキビという回答も得られたが，これは父親が穴吹出身の方であった。

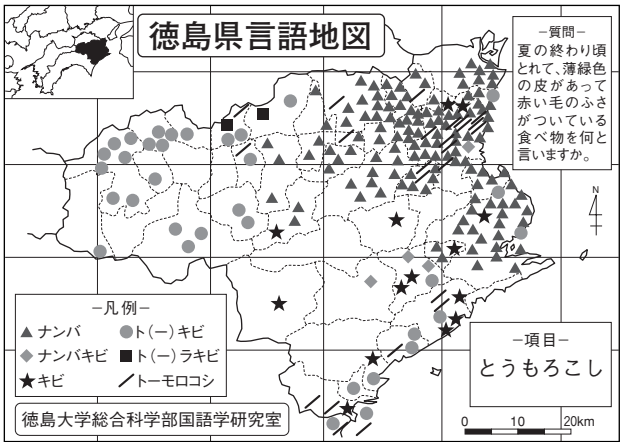


図４　トーモロコシ

４）マブシー

「太陽を見て，あまりに明るいので目を開けていられないような状態」をどう言うかについては，50

歳代後半以上の方からはアマバイ・マババイという回答があったが，それより年齢の低い方からは共通語形のマブシーが回答されている。

5）ミジョー（可能の副詞）

子どもがお使いに１人で出かけることができるかといった時に「ミジョ（ー）行くで？」のように使われる言葉である。この語は，上郡と下郡を区分する目印の１つとして知られている（森・1982）。かつて，この語は上郡と下郡中分（麻植山地・名西山地・名東山地）で使用されており，下郡では使われていなかった。阿波町でも，もちろん確認できていない。このような場合には，ケッコーやヨーが使われるようであり，これもまた，下郡の特長を示している。

４．補遺 ―テグツ（手沓・手靴）小考―

指のところが５本に分かれていて防寒などのために手を覆うものを，この地方ではテグツとよび，それはまだ忘れ去られているわけではないが，この名称は，徳島県内では旧阿波町のほか旧脇町や旧木屋平村の資料で確認できているだけである。『日本方言大辞典』によると，福島県南会津郡の資料に，山言葉として「獣皮の手袋」を指すことと，奈良県吉野郡の資料に「手袋」を指すことが記されている（仙波，2008）。それ以外では，日本手袋工業界のウェブサイトに，現東かがわ市松原出身の両児舜礼（ふたごしゅんれい）が明治20年頃に大阪でメリヤスを用いた手袋製造を始めたことを紹介する記事の中で，「てぐつ（手靴）といわれた指無し手袋」と書かれているだけである。方言辞典からは，その語誌を明らかにすることはできない。また，両児舜礼についての逸話からは，明治中期にこの語が存在したことと，大阪で使われていたことを推測できるだけである。

ところで，テブクロという言葉は，鎌倉時代の文献『吾妻鏡』に使用例が見つかるのだが，これは武具としての「弓懸け」のことであり，また「流鏑馬の時にかぎりて，手袋といふなり」（就弓馬儀大概聞書）という文献もあり，中世においてはテブクロを防寒用などの衣料の名には使わなかったようである。また，中世日本語ではテブクロにもう一つの意味がある。それは，鷹などの鳥が片脚を温めるために羽の中に入れることで，それから人が手出しをひかえる意味に使われるようになった。

衣料としての手袋が普及するのは，江戸時代中期からのようで，『日本国語大辞典』には，洒落本の当世風俗通（1773年）から「手覆（テフクロ）世にめり安といふ。白きを用ゆ夏ばかり」を引いている。

この防寒用などに用いる衣料としての手袋（特に西洋式手袋）について，「16世紀中ごろにポルトガルから西洋式の手袋が伝来。『手覆（ておおい）』や『手靴（てぐつ）』などと呼ばれて流通した」という趣旨の記述がインターネット上にいくつか見られるが，管見の及ぶ範囲では，その根拠を見つけることはできていない。16世紀の文献に現れる「手覆（ておおい）」は手甲と見るのが妥当のようである。

これに対して，「江戸時代には…（略）…オランダからメリヤスの手袋が輸入されるように[注1]」なったというのは事実であっただろう。そして，物と一緒に言葉も伝わったとすれば，手袋をさすオランダ語の痕跡が見られてもよさそうに思うが，それは分からない。なお，オランダ語で手袋を意味するハントスフーン（handschoen）の語構成は，hand（手）＋schoen（靴）であって，これを直訳的に日本語に置き換えると，「手靴」になる。だが，これも確証はない。桂川甫周編『和蘭字彙』では，「手貫（テヌキ）」，古賀十二郎によれば，長崎通事・本木正栄[注2]のメモには「手嚢．てぶくろ」とあるらしい。このうち，テヌキは九州地方の方言として残っている。

なお，蛇足ながら，メリヤスが本来は，靴下を指していたことも関係するかもしれない。

いずれも，今後の宿題としておく。

５．おわりに

今回の調査では，思いもかけず多くの方からご教示をいただくことができた。ご協力いただいた方々のお名前も伺えなかったほどであった。アクセントを除いては，この報告をまとめるまでに十分な資料の収集と整理を行うことができなかったのは，申し訳ないことだった。以下に，お名前を記録できた方々を記し（順不同），ここにお名前を挙げることのできなかった方々も含めてお礼申し上げる。

なお，執筆にあたっては，アクセントの１）～５）を村田が，それ以外を仙波が担当した。

田島紀子，坂東重夫，坂東正広，新居重治，
新居信一，三木敦子，井内俊助，林　忠，
十川勝美，寺井加代子，酒巻忠二，町田寿人，
野崎順子，さこあきら，井上和栄，松岡厚子，
岡村康久，林　光利，河野隼也，酒井佑貴，
近藤杏奈，植野智美，大塚正己，森　隼也，
近藤亜衣，高島てるひと，四宮ちえ，大倉としみ，
渡井　亨，松原美子，瀬尾勇雄

注

1．ニッケイＢＰ　セカンドステージマガジン（大人のこだわり）７／11／02

2．本木正栄＝阿蘭陀通詞（1767～1822）

文献

秋永一枝，上野和昭，坂本清恵，佐藤栄作，鈴木豊編（1998）『日本語アクセント史総合資料研究篇』東京堂出版。

生田早苗（1951）「近畿ア圏邊境地區の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版。

上野和明・仙波光明（1993）「徳島市における３拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学　第４号』徳島大学国語国文学会。

上野和明・仙波光明（1993）「徳島市における３拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学　第６号』徳島大学国語国文学会。

上野善道（1984）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（１）（２）」『日本学士院紀要40巻２号』日本学士院。

加藤信昭（1968）「境界地帯におけるアクセントの問題―吉野川流域を中心として―」日本方言研究会第６回発表原稿集。

金沢　治（1976）『阿波言葉の辞典』小山助学館。

岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実（2010）「徳島県吉野川流域アクセントの動態―吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（２）―」徳島大学大学院国語学研究室。

古賀十二郎著・長崎純心大学比較文化研究所編（2000）『外来語集覧』（長崎外来語集覧刊行期成会・長崎文献社）。

桂川甫周編（1855）『和蘭字彙』（桂川甫周校訂／杉本つとむ解説『和蘭字彙（全５巻）』による）。

坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木　豊編（1998）『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』アクセント史資料研究会。

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室。

仙波光明（2008）「美馬市木屋平村の方言」『総合学術調査報告第54号　美馬市木屋平村』阿波学会・徳島県立図書館。

平山輝男・上野和昭（1997）『徳島県のことば　日本のことばシリーズ36』明治書院。

増田　明（1989）『鳴門の方言』増田　明。

村田真実（2010）「吉野川流域のアクセント―京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界―」徳島大学大学院平成21年度修士論文。

森　重幸（1962）『徳島県のカマキリの方言』私家版。

森　重幸（1982）「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会。

山名邦男（1956）「徳島県下の音調」『兵庫方言　１』兵庫方言学会。